



【教育目標】 自ら学び正しく判断して行動する国際性豊かな児童生徒の育成を  
~~~~ 一人一人が輝く子どもの姿を求めて ~~~~

☆8月の目標

- ☆学習をがんばろう
- ☆みんなと  
なかよくしよう
- ☆笑顔で  
あいさつしよう

☆配布物のお知らせ

1 学校便り

☆今後の行事計画

・9月23日 運動会

☆四年一組 写真日記

栗原 明衣

わたしは昨日、会っていなかったお友だちといっしょに花火をしました。花火は、いろいろな形を見せてくれました。星のかたちがにぎやかでした。色もいっぱいありました。白、赤、青、そして、黄色がとってもおだやかでした。

楽しかったのは、橋の上から見れたことです。私は目を光らせて見ました。わたしは、お友だちと花火が見れて、とっても楽しかったです。



☆四年一組 写真日記

杉野 文明

この写真は、家族で化石とりに行った時です。六月十五日の日曜日にオハイオに行った時です。化石が取れる場所があり、そこに行きました。お父さんが、「こういう場所にはヒルが、いっぱいいるんだな。」と、言いました。お母さんは、「えっ、ヒル!」と、びっくりしました。お母さんは、「だから、なにかおちてくるんだ」と、言いました。そして、お父さんが、お父さんが、化石を見つけて、化石をいっぱい見つけました。すごくとれて楽しかったです。



☆四年一組 写真日記

千村 健太

この写真は、ぼくがヘチマに水やりをしている写真です。ぼくが六月二十七日に日本の学校でもらったヘチマです。

このヘチマは、理科の先生が「ヘチマを育てたい人は手を挙げて下さい。」と言いました。そこで、クラスの一人の人がじゃんけんをして、ヘチマを育てる人を決めました。ぼくは、ヘチマを育てる気はありませんでした。理由は、どうせじゃんけんをしても負けるんだと思ったからです。結果は勝ってヘチマをもらうことになりました。家に持って帰ってお母さんに、学校でじゃんけんで勝ったからヘチマをもらえたよ、と言いました。

その後、おばあちゃんと いっしょにヘチマを植えて水やりをしました。



☆六年一組 「セロ弾きのゴーシュ」

吉田 ロイス

ぼくは、8月から現地の校のバンドでフレンチホルンを始めます。夏休みにレッスンを受けて準備をしています。初めは、いい音が全く出ませんでした。でも、練習するたびにうまくなっていきます。ドレミファソラシドは全部弾けるようになりました。ゴーシュは、毎日昼から夜中までたくさん練習しています。くれどもうまく弾けず、楽しく泣いて泣いているゴーシュがかわいそうに思いましたし、どうしてそんなに練習しているのに上手にならないんだろうかと不思議に思いました。



ある晩から、動物たちがゴーシュの家にやって来ます。ねこがゴーシュの畑のトマトを勝手に取って、おみやげに持って来たので、笑ってしまいました。最初は、動物たちがゴーシュの音楽を聞きに来たとは思っていませんでした。でもそのうちには、ゴーシュの音楽が物たちは、ゴーシュの音楽がセロを弾けるように手伝っていたのです。ゴーシュはそれを分らないで、子だめきにはこやかっこう、子だめきにはやさしくありませんでした。最後の野ねずみの親子には、パンをあげるほど、やさしくなりました。ゴーシュの音楽が動物たちの病気をなおしてくれましたから、その恩返しにゴーシュに音楽の特訓をしたと思います。

そして、この物語では、動物が人間の言葉を話します。そしてゴーシュは、それについて、ぼくは不思議に思いますが、一番最後に、ゴーシュはアンコールにインドのトラ狩りの曲を弾きます。聴衆は、一生けんめい聞いていました。楽長も仲間もみんな「よかったです。」とほめてくれました。ぼくも、ぼくの家の庭にいるうさぎや、鳥たちからフレンチホルンのレッスンを受けたいです。

☆読書感想文「宮沢賢治作品を読んで」

☆六年一組「よだかの星」

佐藤 隼人

「よだかの星」を読んで、ぼくは「かなしいな」と思いました。見た目がみにくいからといって、まわりからいやなことを言われたり、名前に「たか」が入っているから、たかにいじわるされたりして、かわいそうだと思います。よだか自体は何も悪い事はしていないのに、なぜまわりの鳥は見た目でそんなにいやなことを言うのだろうと思いました。よだかも悪いことをしたことがない、それよりも赤んぼうのめじろを助けてやったこともあるだから、もっとうどうとうとしてもいいのには思いました。でも、よだかはたかの仲間ではないから、たかはこわい相手なんだろうな、つかみ殺すぞなんて言われて、こわかったんだらうなとかかわいそうでした。そんなよだかも虫を食べていて、虫にとつたらこわい鳥なんだろうなと思います。よだかは、自分がたかに殺されると思ったら、毎ばん虫を殺していると思つたら、つらくなってしまうなんて、心がやさしすぎるんだと思います。そして、おとうとのかわせみにも必要以上の魚をとらないように言っているの、ぼくもなんだか無だ使いをしてはいけない気になりました。そして、夜の鳥なのに、お日さまに向かつて飛んで行ったり、夜にはいろいろな星にむかつて行ったり、ぼくは何をしたいのだろうと不思議に思いました。焼けて死にたいのか、星といっしょにいたいのか、なぜむちゃくちゃな事をするのだろうと思います。

最後の方で星になれたみたいで、よだかにはよかったなと思います。ぼくは、よだかがかわいそうな鳥だと思いました。ぼくは、見た目で人とかを悪く言いたくないな

☆六年一組「よだかの星」

内田 羽為斗

僕は「よだかの星」と言う作品を読んで、切なくなりました。この物語の主人公の「市蔵」本名「よだか」は、実にみにくい外見をしています。それで他の鳥たちに馬鹿にされいじめられています。めじろのヒナが巣から落ちたのを助けてあげたときも、助けてあげためじろの親は、子供を奪い取るようにしてその後、よだかを馬鹿にして笑ったんです。ここでめじろの親を、ぼくは最低だと思いました。

ある日、鷹に名前が似ているので、「市蔵」と言う名前に変えろと言われます。「あさっての夜までに名前を変えなかつたら、つかみ殺すぞ。」と脅されます。ここでもよだかが可哀想になりました。よだかは思いつきで飛ぶと、空がまるで二つに切れたように飛ぶらしいです。もう一つは、その鋭い鳴き声が、どこか鷹に似ていたためです。飛ぶ時などは、まるで鷹のように見えたらしいです。一匹のカブトムシがよだかののどに入り、ひどくもがきました。よだかはそれを飲み込んだとき、なんだか背中がぞっとしたように思いました。よだかは、自分が多くの虫の命を奪って生きていて悲しくなり、もう星になつてしまいたいと望みます。ここでもよだかが可哀想です。ここで、よだかは弟のかわせみに、遠い所へ行くこと分かれを告げます。これで兄弟離れ離れになってしまいます。まずよだかが向かった所は、お日さまの所へ行つて自分もそこへ連れて行ってほしいと頼みますが、よだかは昼の鳥ではないから、星に頼んでごらん、と言われます。でも、全て星に断られてしまいます。もうよだかがかわいそうすぎて、心が痛いんです。そして最後に、よだかは鷹のように高く高く、ずっと高く舞い上がって消えていくシーンは感動的でした。この作品は、いじめをするなどいうように読み取れます。最高に感動する作品でした。

☆六年一組「よだかの星」

辻本 凜香

「よだかの星」を読み終わると、なんだかとても切なくなりました。よだかはみにくい外見のために、他の鳥たちから相手にされなかつた。しかも、よだかはタカから名前を改名して「市蔵にせよ。」と言われてしまう。自分自身のひょうかをされず、外見やにた名前と言うだけで判断されるなんて悲しいと思う。私も見た目だけだけではなく、努力したことやがんばったことをひょうかしてもらえないとうれしいです。

今、私は大好きな絵を毎日かいています。でも自分が満足できる絵が完成するまでには、とても時間がかかります。完成した絵を見ただけで、うまい、へたを判断するのではなく、と中で影のつけ方や光の照り方など、何度も練習して努力しました。もしこの努力がよだかと同じようになつてしまつていたら、悲しいと思います。

よだかは最後に、自殺するのではなく星になりたいと願っていました。よだかは他の鳥たちをうらんで死ぬより、星になつて他の鳥たちや自分の兄弟を見守りたいと思つたんだと思います。よだかは他の鳥たちにきられていても、よだかの外見についていろいろ言われても、心がすごく優しくかつたよだかは、ただ見守つていただけのいいと思つたんだと思います。よだかは隣の火のような青い美しい光になりました。私は最後によだかがきれいな星になつて、よかつたなと思



よだかの星 宮沢賢治

